

美大付高生 初の人形制作

来月 土崎港曳山まつり

秋田市の重要無形民俗文化財「土崎神明社祭の曳山行事（土崎港曳山まつり）」が、7月20、21日（土、日）を前に、秋田公立美術大付属高等学校（同市新屋）の生徒有志が、運行する町内の一つである旭町一区の曳山の人形を初めて制作した。生徒らは長い歴史のあるまつりに関わることができ、貴重な体験になったと、当日の運行を心待ちにしている。



人形制作は、地域貢献を目的とした学院の地域協働プロジェクト「レタイフザザインラボ」の一環。取り組みを知った旭町一区の実行委員会メンバーを通じて依頼を受けた。旭町一区の曳山は、金太郎のモデルとされる坂田金時が人々を襲う巨大なコイを退治する場面が題材。生徒らは2月、粘土で模型を作って実行委メンバーにプレゼンテーションし、制作をスタート。週末に集会所

旭町一区が依頼

に集まり作業に当たった。材料の発泡スチロールを切り出し、着色するなどして、先月27日に全てのパーツを完成させた。組み立てたコイは高さ約幅が約2・5倍、奥行き約1・1倍。全体のバランスやかっこよさを考えて頭の角度を調節したほか、主役の金太郎人形が立っているときにコイが跳びはねる迫力を出すために、魚体を青くした。3種類のひげを細かく使い分けて描いた「



©秋田魁新報社

関稲穂さん（2年）は「近づいたり離れたたりしてきれいなのが確認しながらいなクラクション模様に進めた」と語る。学院美術部の顧問でもある滝田啓吾教諭は「生徒たちにとっては、依頼を受けて作るという相手ありきの表現を实地で学ぶ良い機会になったのでは」と話す。デザインを考えたリーダーの鎌田ひかるさん（3年）は「大がかりな制作で、皆で完成イメージを共有できるように意識した。歴史あるまつりの一部に、自分たちも加わらせてもらった思いがある。当日に完成した人形を見られるのが楽しみ」と話している。（針金友理子）

コイの人形にうろこや模様を描く生徒ら